

## 高校野球部の監督

都立高校で野球部の顧問のなり手がなく困っている学校がある一方で、同じ学校に監督をやりたい教員が複数いることもある。高校野球の監督は魅力的な仕事であり、それをやりたくて教員になったという人も多くいるので、こうしたケースは案外多く、なかなか複雑な雰囲気になりかねない。通常は教員同士が話し合っ解決するが、ときには校長が出てきて判断することもあるらしい。

1人が監督になると、大体は他の人は責任教師、助監督、コーチとしてサブに回るが、サブに回った人は「自分はこの学校で何年後に監督になれるのか、それともなるチャンスは無いのか」を考える。これは指導者としてのライフプラン上大きな問題である。また監督になった人も、次の待っている人にそろそろ代わらないと、と気を使い監督を譲って移動したりすることもある。

またやっと自分の番が回ってくると思っていたが、種々の事情から監督がそのまま続けることになったことや、他校から実績十分な指導者が異動してきて、その人が監督になり、なかなか監督になれないなんて話もある。

東京都の教員の異動年数が新任4年、他は6年の基準とされ(例外も認められる事はあるが)移動までの年数も関わり、昔より監督交代が速くなってきているので、長期的なチーム作りがしにくくなっているのは事実であろう。

複数の監督希望者が被った場合、その学校での指導実績(今まで監督をやっているという継続性)の他、他校での指導者としての経験・実績、自分自身の選手としての実績(どんな高校で野球をやってきたか、強豪校か否か、または野球経験がないかなど)、大学や社会人等での実績、教科(体育科かそうでないか)、その学校での異動予定までの残り年数、校内での担任、分掌(3年の担任は進路指導で、教務・進路・生活指導の主任になると会議などで忙しい)、家庭の事情(子供が小さい、介護など)を考慮して決めているようだ。

私は42年間の都立高校の教員生活全てを野球部顧問で、そのうち35年監督として指導に携わることができた。強豪校出身でもなく、大学での野球経験もない社会科教員の私が、これほど長く監督をできた事は幸運なことである。この間ずっと、いわゆる「体育の野球専門」と言われる人たちに負けたくないという意識が私の中で強くあった。監督を続けていくためにも、生徒からも、親からも、学校からも求められる人材である続けたいと、それなりに周囲に配慮し続けたこともある。

現都立西高校・秋森監督は自分の高校野球部の1学年下の後輩だが、「宮本さん、昔からそんなに野球好きでしたっけ?」とか、「監督をずっと続けてこられたの宮本さんの政治力ですね」などと言われた。同世代の指導者からは「まだ続けるんだ。いつまでもやめないと若い人たちが監督になれずかわいそう」「若い人たちは私達を早くいなくなれと思ってるんじゃないの」と言われた。もう若い指導者を支える立場になるべきとも思うが、この年齢になり、やっとわかったこと、気づいたことがたくさんあり「このタイミングで止められない。毎年毎年今ならもっと良い指導ができるはず」と思ってしまう辞められないでいる。

そんな自分の若い指導者の方々への罪滅ぼしの意味を込めて、自分の経験を(特に恥ずかしい、失敗の経験も)伝えようと思い、こうした文章を書いている。